

ミカイロヴスキの社會學說の創始的價值

米田庄太郎

一 露國に於ける社會學研究の近況一斑

夫れ社會學者中には極端なる國家主義者も民族主義者もあれば、亦社會主義者もある。更に極端なる保守主義者も亦進歩主義者もあり、貴族主義者も亦平民主義者もある。併し本純なる社會學其物は何れの政治的主義とも必然的なる關係を有するものでない。只ありしがまゝに又あるがまゝに社會現象を研究して、其の中に一定の法則或は傾向或は規律性を發見せんとするのが、即ち社會學の目的であり、職分である。而して其處に科學として社會學の存立が認めらるゝ理由があるのである。若し何れかの政治的主義を辯護することを以て社會學の目的と考へる人があらば、其の人はまだ科學としての社會學の眞義を理解しない人である。又其の人の説く事は科學としての社會學ではなくして、其の政治的主義の理論的辯護を試みる偽而

非社會學である。併し實際に於て此の種の偽而非社會學説の多く行はれて居るが爲めに一般の人々は大に社會學の本質を誤解して居るのである。而して此の種の誤解に於て殊に社會學を以て社會主義の學問と見る誤解は、嘗て西歐諸國や米國にも廣く行はれて居つたが、我國では今日も尙ほ一般に行はれて居つて、余輩社會學の專攻者が屢々迷惑を蒙つて居るのであるが、余はかゝる誤解が一日も早く消失せんことを切に希望して居る。と云ふのはかゝる誤解の行はれて居る以上は我國に於て社會學は到底健全なる發達を遂げることが出來ぬからである。而して露西亞に於ても社會學に對する種々なる誤解は、輒近の大革命の起るまで廣く行はれ、殊に同國の政府は社會學を危險現して何れの官立大學に於ても其の講座を設けて居らなかつたのである。尙ほ私立學校に於ても始めて社會學の科目を設けたるは、千九百八年に新設されたるペトログラードの心理的神經學學院である。併し社會學の研究が全く行はれて居ら無つたと云ふのではなく、智識階級中の進歩主義の人々の間にありては斯學は實に一の人氣學問となつて居つた。又多くの社會改良家は經濟的、社會的、政治的諸問題の解決の鍵を斯學に求めて、盛かに之を研究して居つた。尙ほ官立大學に於ても法學及び政治學の教授等は此等の學問を實證的基礎の上に

改造せんが爲めに社會學の研究に力を盡くしたが、其の中よりコルクノヴ (Korknov) やロツレンツスキ (Maxim Maximovitch Kovalevsky) の如き社會學者が現はれた。又歴史哲學者の間にも社會學の援助によりて形而上學的前提より同學を解放せんとする運動が起り、其の中よりカレイエフ教授 (Nikolai Ivanovitch Kareyev) の如き社會學者が現はれたのである。更に露國の社會學的文學を調らべて見ると我國よりは遙かに豊富にして、十年前に出版されしカレイエフの「社會學研究序論」[Vvedyeniye v Izoobcheniye Sociologii] 第二版卷末附録の露西亞語社會學書目録によれば、西歐諸國并に米國の社會學者及び斯學に關係ある學者中左の諸家の著作が翻譯されて居る。Aehelis, Below, Barth, Bernstein, Buckle, Bouglé, Bourdeau, Windelband, Woltman, Worms, Wundt, Giddings, De Greef, Grosse, Gumplovicz, Demoor, Massart, Vanderveelde, *De Roberty**, Gutewitch, De Pourville, Drammond, Girard-Toulin, Durkheim, Seligmann, Simmel, Sombart, Kelles-Krausz, Jodle, Kantsky, Quételet, Kidd, Collins, Croce, Cunow, Lacombe, Labriola, Langlois, Seignobos, Lulbock, Le Bon, Letourneau, Lippert, *Lilienfeld**, Loria, Lewes,[†] Mill, Mayr, Meyer, Menger, Mehring, Mechnikoff, Monier, Maine, Posada, Rigolage, Romanes, Rümelin, Sighele, Mayo-Smith, Spencer, Tardif, Tarde, Ward, Freeman, Rouille, Stammeler, Engels, Espinas. 而して又露國の學者の社會學的著作百十餘種が右の

目録中に列擧されて居る。然るに其後十年間には尙ほ多數の社會學的著作及び翻譯が出版されて居るから、今日若しカレイエツの目録の如きものを作らば、其の數は遙かに増加して居らうと思ふ。終りに露國に於ける社會學的雜誌に就て調らべて見ると、斯學専門の雜誌としては千九百十三年にコヴァレウスキとツ、ロベルチーとが協力して出版し始めたる「社會學に於ける新觀念」と題する年報一種あるのみにして其外には一もなす。併し目下の大戰亂前に出版されて居つた月刊雜誌中にて殊に多く社會學的論文を掲載して居つたものは Russkaya Mysl (露西亞思想) Russkaya Zapiski (露西亞紀事) Zavyety (誓約) Sovremenny Mir (現代世界) Vestnik Evropy (歐洲新報)等である。又 Voprosy Filosofie, i Psychologee (哲學及び心理學問題)の如き専門雜誌にして社會學的問題を論ずるものもある。又大戰争前に既に廢刊されて居つた雜誌中社會學的論文を掲載して居つたものは少なくなす。ヘッカーの著作 (Hecker, Russian Sociology, 1915) 卷末の附録中に其の主要なるものゝ表が擧つて居るから、就て參考せられよ。要するに大戰争前の露西亞に於ては、何れの官立大學に於ても社會學の講座は設けられず、又民間にありては斯學に關して種々なる誤解偏見の行はれて居つたに係らず、斯學は我國に於てよりも盛かんに研究されて居つたのであるが、大戰争の終結した

る上は益々盛かんに研究され、大なる發達を遂げるであらうと思ふ。蓋し社會學の健全なる發達には、研究の自由の充分に承認されることが尤とも根本的なる一條件であるが、戦後の露西亞にありては其の自由は充分に承認されるであらうと考へられるからである。

二 ミカイロヴスキの社會學說研究の參考書

却説露西亞に於ける社會學研究の近狀の一斑は前節に於て述べしが如きものであるが、然るに同國の學者にして社會學の専門家と認む可き人々はリリンフェルト、ツロベルチー、ノヴィコフ等の如き西歐に寄寓し、又は佛語や獨逸語で著述した人々の外には甚だ少くない。而して他の學問を専攻する人々が之を兼修して居るか、又は同國の實際的な社會問題、政治問題、經濟問題等を解決する理論的基礎として社會改良家や思想家が之を研究して居るかと云ふのが其の一般の狀態であつた。更に其等の人々は一般に英米獨佛等の社會學者の說を祖述するか、又は之を折衷するかであつて自己獨特の學說を建設した人々は甚だ小數である。而して其の小數の學者の中で殊に重要なる地位を占めて居るのは、同國の思想界に於て主觀主義派と稱せら

るゝ一派の創設者と見做されて居るラヴロフ Peter Lavroovich Lavrov. (1823—1900) と同派に屬するミカイロヴスキイ Nikolai Konstantinovich Mikhalovskii (1842—1904) である。殊にミカイロヴスキイの社會學説は露西亞に於て尤とも創始的なものと認められて居る。それで余は茲に特にミカイロヴスキイの社會學説を研究して、其の創始性の眞價を吟味し、以て露西亞の學者が社會學の現代的發達上如何なる貢獻をなして居るかを批判的に考察して見たいと思ふのである。然るにミカイロヴスキイは他の多くの露國社會學者と同じく専門の社會學者でない。彼は哲學者であり、文藝批評家であり、又「人民主義運動」と稱せらるゝ社會運動の熱誠なる指導者であつた。而して其の職業は雜誌記者であつた。彼は社會學の教授として純科學的に社會學を研究したのでなく、又科學的に組織して彼の社會學を論述して居るのではない。彼の社會學説はやはり多くの他の露國社會學者の夫れと同じく彼の哲學思想と混交し、而して彼の社會運動の理論的精神的基礎として雜誌論文の形にて斷片的に論述されて居るのである。勿論彼は一貫せる社會學的根本思想を抱いて居つた。而して之を組織的に展開する大著作を公にすることを常に希望して居つた。併し雜誌記者として又批評家としての彼の多忙なる生活は、遂に彼をして其の望を達するこ

とを不可能ならしめたのである。されば彼の社會學說を組織的に理解せんとすれば、彼の公にせる多數の雜誌論文や批評文を涉獵して研究者自から之を組織的に整理しなければならぬので、容易なる業でないのである。併し幸ひに今日では既に之を試みたる幾多の研究者が其の研究を公にして居るので、余輩は其等の著作によりて大なる便宜を得るのである。

今ミカイロヴスキ一の社會學の研究に關する最近の一著作、アルメニアの學者 Frangian の N. K. Mikhailovsky als soziologe und Philosoph (1913) 中に記述されて居る處を見るに、露西亞の學者の著作でミカイロヴスキ一の社會學を論究せるものは左の如くである。

- S. Uschakov. Ueber Mikhailovsky. (Zeitschrift "Snanije," N. 10, 1873)
- P. Miloslavsky. Die Wissenschaft und die Wissenschaftler in der russischen Gesellschaft. 1879.
- M. Filipow. Ueber Michailovsky, (Zeitschrift "Russkoe Bogatstvo." N. 2, 1887)
- N. Raschkowsky. Michailovsky vor dem Gericht der Kritik. 1889.
- N. Karejew. Die Grundprobleme der Geschichtsphilosophie. 1883.
- ” ” Historisch-Philosophische und Soziologische Studien. 1895.

- „ „ Das Wesen des historischen Prozesses und die Rolle des Individuums in der Geschichte. 1890.
- „ „ Einleitung in das Studium der Soziologie. 1897.
- S. Ushakov. Soziologische Studien. 2 Bd. 1896.
- A. Wollinsky. Russische Kritiker. 1896.
- N. Berdiaew. Subjektivismus und Individualismus in der Sozialphilosophie. 1900.
- N. Berdiaew und Pansky. Michailovsky's Soziologie. 1901.
- P. Lawrow. Die Formel des Progresses von Michailowsky. 1906.
- Lunkewitch. N. K. Michailowsky. 1906.
- W. Tschernow. Philosophische und Soziologische Studien. 1907.
- „ „ Michailowsky als Politischer Publizist. 1908.
- Iwanow-Rossumnik. Geschichte des russischen gesellschaftlichen Denkens. II. Bd. 1908.
- B. L. Litschikow. Der Subjektivismus und die Subjektive Methode, eine Kritische Studie über Michailowsky. 1908.
- G. Plechanow. Zur Fragen des monistischen Standpunktes in der Geschichte. 1895.

然るに此等の著書論文中、當大學の社會學研究室にはカレイエヅの著書二種の外
まだ購入して居らないから本文を草するに當て遺憾ながら余は其の他のものを參
考し得なかつた。併し獨、佛英語等の著書論文にしてミカイロヴスキの社會學說
の研究に關する左のものは社會研究室及び哲學研究室に於て所藏して居るから、余
は總て之を參考することが出來たのである。

E. Radlow. Bericht über die Arbeiten auf dem Gebiete der Philosophie in Russland. ("Archiv
für Geschichte der Philosophie." 1890)

Ueberweg's. Grundriss der Geschichte der Philosophie. IV. Bd. "Philosophie in Russland."

Jakob Kolobowsky. Die Philosophie in Russland, in die "Zeitschrift für Philosophie und Philo-
sophische Kritik." 1894.

Ludwig Stein. Die Soziale Frage im Lichte der Philosophie. 2 Aufl. 1903.

Ossip-Louwié. La Philosophie russe contemporaine. 1905.

Eisler, Philosophen-Lexicon. 1911.

Th. Masaryk. Zur russischen Geschichts- und Religionsphilosophie, Soziologische Skizzen. II.
Bd. 1913.

E. Frangian. N. K. Michailovsky als Soziolog und Philosoph. Eine Sozial-Philosophische Studie. 1913.

Kowalewsky, N. K. Michailovsky Sociologue. (Revue Internationale de Sociologie. 1914)

J. F. Hecker. Russian Sociology. 1915.

ミカイロヴスキ自身の著作に就ては、幸ひに千九百六年に「ミカイロヴスキ」著作完全集『Polnoe Sovranie Sochnyeni H. K. Mikhailovskago』と云ふ題名で其の全集大冊八巻が出版され、其の後更に二巻が加へられた。併し當大學社會學研究室にて數年前外國書店に之を注文せし際第一巻及び第二巻は送つて來たが、第三巻以下未だ到着して居らない。而してミカイロヴスキの社會學上の論文は右全集の諸巻に散在して居るのであるから、只第一巻及び第二巻だけでは彼の社會學說の全體を窺ふことは出來ないが、併し彼の社會學上の論文中、其の研究者が殊に重要視して居るものゝ多くが、右二巻中に收められて居るから、余輩は右二巻によりて少くも彼の社會學說の根本思想は之を充分に窺ふことが出來ると信ずる。而して彼の社會學說の研究者が殊に重要視して居る論文と云へば大體上左の如きものである。

Ohno takoe Progress? (進歩とは何ぞや)。是れ彼の社會學的論文中最も重要視さ

れて居るものゝ一にして千八百九十七年には佛語に譯されて居る。Mikha-ilovskii, Qu'est-ce que le progrès? 全集第一卷中の最初の論文。

Teoriya Darvina i Obshchestvennaya Naooka. (ダーウイン説と社會學) 全集第一卷中。

Analogicheskii Metod v Obshchestvennoi Naookyei (社會學に於ける類推法) 全集第一卷中。

Barba za Individualnost. (箇性の爲めの戦ひ) 是れも亦彼の社會學的論中尤とも重要視されるものゝ一、全集第一卷中。

Geroi i Tolpa (英雄と群集) 是れ彼が千八百八十二年に公にせし論文にして、群集心理研究の最初の著作、全集第二卷中。

Naoochniya Pisma k voprosu o Geroyakh i Tolpye (英雄と群集との關係に關する問題に就ての科學的書簡) 全集第二卷中。

Patsiologicheskaya Magiya. (病理學的魔術) 全集第二卷中。

Eshtche o Geroyakh. (尙ほ英雄に就て) 全集第二卷中。

Eshtche o Tolpye. (尙ほ群集に就て) 同。

Chto takoe Sshaste? (幸福とは何ぞや)。

Naochniya Pisma (科學的書簡)。

Organ, Nedyelimo, Obshchestvo. (機關個人社會)。

Idealy Chelovechestva i Estestvennaya Khod Vseitsei. (人類の理想と事物の自然的進行)。

Politicheskaya Ekonomiya i Obshchestvennaya Naoka. (經濟學と社會學)。

Literatoura i Zhizna (文學と人生)。

Filosofiya istorii Louis Blankha. (ルイブランの歴史哲學)。

Kritika Outilitarizma (實利主義の批判)。

三 ミカイロヴスキの傳記人格並に時代

ミカイロヴスキの社會學說の研究に關する主要なる參考書は大體上前節に於て述べしが如きものであるが、然るに彼の社會學說は第一節に於て述べし如く、彼の哲學說を混交して居るのであるから、今彼の社會學說を根本的に理解せんとするに當ては、先づ彼の哲學說の根本思想をよく會得して置かねばならぬ。それで余は先づ彼の哲學說の根本思想の一般を論述して置かうと思ふのであるが、尙ほ夫れに先

だち彼の略傳を述べて置きたいと思ふ。是れヤハリ先きに述べし如く、彼の哲學説及び社會學説は彼の生活と甚だ密接なる關係を有するものであり、且つ彼の傳記彼の人格に就てはまだ一向我國に知られて居らないと思はれるからである。

ニコライ、コンスタンチノヴィチ、ミカイロヴキイは千八百四十二年十一月十五日にカルシユ縣メヅオヴスクに生る。(但しフランギアの調査した處によると、クルボヴスキイの論文やユーバロウエヒの哲學史及びアイスラーの哲學者字典に記されて居るミカイロヴキイの生年并に死亡年は共に誤つて居ると云ふ。以下彼の傳記に就て述ぶることは、全くフランギアン、アイスラー、マーザリク等の著書に依る)。

彼は貧乏貴族の家に生れ、中等教育を了りたる後、ペテログラードの鑛山學校に入學したが、之を卒業せずして退學した。而して早くより文筆に親む傾向を示して居つたが、千八百六十年十八歳にして記者生活に入り、死するまで之を持續したのである。千八百六十九年まで彼は Knisichy Veshnik, Nedel, Sovremennoe Obshchestvo 其の他の雜誌に寄稿して居つたが、其の最も多くは Literaturora i Zhizn (文學と人生)と云ふ一般的題名の下に文學并に人生に關する諸問題を論ぜるものである。彼は又千八百六十七年ブルドンの「佛蘭西民本主義」を翻譯した。而して此の千八百六十年代は彼の思想生活

上の第一期をなすものであるが、同年代の終り頃からして彼は哲學上の諸問題、殊に社會學的、生物學的及び歴史哲學的諸問題を熱心に研究し始めた。彼はブルードン、ヤルイ、ブランやカール、フォン、ベリア等をも學んだ殊にコント、ダーウィン、ミル、スペンサー等の熱心なる崇拜者であつた。併し千八百七十年代の始め頃には、此等の諸家の影響は減少して來た。而して當代の露西亞の思想家の中で彼が大なり小なり影響を受けたものは、ヘルツェン、チエリシエフスキ、ラヴロフ等の人々であつた。併し若きミカイロヴスキの思想に殊に強き影響を及ぼしたるは天死せる思想家ニコライ、ヂミトリエヴィッチ、ソシンであつた。彼は千八百六十六年二十三歳で死去したのであるが、ミカイロヴスキは非常に彼を尊崇し、常に彼は自分の友にして又師であると云ふて居つた。

ミカイロヴスキの思想生活の第二期は千八百六十九年より始まる。此の年に彼はネクラソフの編輯せる *Otechestvennyye Zapiski* (母國記錄) と題する學問雜誌の尤とも有力な又活動的な記者の一人となり、而してネクラソフの死去後は又其の編輯者の一人となつて、千八百六十九年より同八十四年に至る十五ヶ年間同雜誌上に於て異彩を放つて居つた。此時期は又實に彼の思想的生産物の最も豊富なりし時期

にして、彼が千八百六十九年同雜誌上に於て公にせし「進歩とは何ぞや」と題する論文は、露國思想界に一偉人の出現し來れることを世に知らしめたのである。夫れより同雜誌上に於て彼の續々公にせし諸論文は彼の社會學的、生物學的及び批評的アルバイトの最とも優秀なる又根本的なものにして、之れによりて彼は偉大な思想家、第一流の批評家として世に認められたのである。千八百十五年同雜誌の廢刊せし後は、彼は *Seyernii Vestnik* の記者となり、且つ *Ruskaya Mysl* などにも寄稿して居つた。併し其の間には彼は別に注意するほどのものを創作して居らない。而して千八百九十年に有名なる *Russkoe Bogatstvo* (露西亞の富)の主筆となり、千九百四年一月二十八日死去するまで之を編輯して居つた。吾人は千八百九十年後を彼の生活の第三期と見做すことが出来るのである。

ミカイロヴスキは早くより雜誌上に於て諸派の説と戦ふた。彼は一方に於てはスペンサー派の社會學、殊に社會有機體説と戦ひ、又他方に於ては社會的利益を全く無視するピサレヴ一派の偏局なる功利主義的利己主義及び實證主義と戦ふた。彼は更に偏狹なる唯物史觀を主張するマルクス派の學者等と多年間奮闘を續けた。要するにミカイロヴスキは確信熱誠の人にして思想界の大戦士であつたの

である。而して又彼は常に露西亞の立場を失はず、其の説く處は特に露西亞的であつたのである。

ミカイロヴスキの文體は單純で優美で而して皮肉的な色彩を帯びて居ると云はれて居る。彼は強き力と深き確信を以て書いて居る。故に彼の筆に成るものは總て生き生きとして新し味を帯びて居る。如何に乾燥な問題でも一度彼の頭を通過すれば生命あり趣味ある思想となつて生れたのである。要するに彼は戦ひに充ちたる露西亞の社會生活の眞中に立ち、常に實際的なる人生問題に着目して、觀察し、思考し、奮闘した人であつたのである。

終りに余はミカイロヴスキの活動せし時代の形勢一般を述べ、且其時代運動に於ける彼の地位と意義とを概論して、以て彼の哲學思想殊に社會學說の眞意を理解する準備としたいと思ふ。夫れ前世紀の四十年、五十年、及六十年の三年代は露西亞民族の歴史上甚だ興味ある活動時代であつた。而して其の活動は西歐諸國に於ける社會的經濟的、政治的、生活の新しい發達の影響を受けて勃興せしものであるが、今此の時代の西歐諸國に於ては、工業は大に榮へ、資本主義が著しく發達して益々強大なる勢力を振ひ、而して階級的利益の衝突が愈々鋭くなりて國民の階級的分化が重

大なる意義を有して來た。されば此の形勢に應じて新しき社會的思想も段々に發達しつゝあつたのである。然るに當代の露西亞は之れと異りて其の社會的經濟的關係に於て大に後れたる状態にあつた。そこで國民の先覺者は西歐の進歩に刺激されて其の状態を改良することの必要を痛切に感じ、全力を盡くして社會的運動を起して來たのである。而して彼等の殊に最も重大なる社會問題と考へたのは農奴問題であつた。是れ西歐諸國に於て既に全然消失せる農奴が尙ほ露西亞に存在して居ると云ふことは、つまり露西亞に於ては人格の價値がまだ承認されて居らないことを證明するものにして、而して彼等を解放することは、近代精神の上より見て最も根本的なる問題であると考へられたからである。此くて人民解放問題つまり農民解放問題は當代の學者、思想家其の他進歩主義の人々の總ての一般的共同的問題となつたのである。新時代の代表者、インテリゲンチヤの人々は總て人民解放問題を彼等の共同的大問題として運動を起した。而して其の結果は千八百六十一年二月十九日の有名なる解放令となつて現はれ、五千二百萬人の農奴が解放された。此解放令の發布されし際には總ての階級を通じて非常に熱誠なる歓迎の情が起り、アレキサンダー第二世は救世主として讚美された。然るに其解放條件の詳細が普

く知らるゝに至るや、人民の味方せる進歩主義の人々は、大に失望した。是れ此の解放令はつまり農民に形式上の自由を與ふると同時に大地主の利益を圖る一種の妥協策に外ならぬことが覺知されたからである。大地主は此の法令によりて人民に土地を譲り渡すと、同時に之れに對して非常に高き代價を要求することが出来るから、人民はヤハリ永久貧困の境涯を脱することが出来なくなる。此くて國外からはバクニンやヘルツェンは大に之れに反對し、殊にバクニンの如きは農民が直ちに革命を起さんと彼等熱烈に勸告した。而して國內にありては當時インテリゲンチヤの指導者であつたチエルニシエフスキも亦大に反對した。夫れより彼等は農民を誘導して大革命を起さしむる陰謀を企だてたが、併し其の計畫は政府の發見する處となつて全然失敗した。而も彼等の組織せる革命的秘密結社は此の失敗の爲めに其の運動を停止しなかつた。されど此の時彼等は二派に分れた。其の一派は人民を教育して漸次的に革命の準備をなさんとするもの、即ち人民を革命に教育せんとするもの、其の二は人民は常に革命的のものであるから、其の爲めに彼等を教育する必要はないと考へたものである。而して前者の教育的運動は段々に發達して遂に千八百七十年代の始めに行はれた、人民の中へ行く運動となつた。此の運動は露國の歴史

上に類例のなき一種の宗教的大リヴァイヴァル運動に類するものにして、之れに携はれるものの多數は青年學生であつたが、併し彼等のみに限らず、其の内には多くの學校教師、判事、醫師、軍人、官吏等も交つて居つた。彼等は一切の安樂を放棄し身には農民同様の粗服を纏ひて農民の間に入り、多くの困難を忍びて彼等と交はり、彼等に新しき自由を宣傳せんと企てたのである。併し此の運動は其の直接の目的に就ては全く失敗した。農民は嘗に彼等の教に耳を傾けなかつたばかりでなく、又屢々彼等を警官の手に渡した。此くて此運動はインテリゲンチヤの人々に二つの事實を明らかに教へたのである。一は人民即ち農民の大多數はインテリゲンチヤ及び彼等の解放者の進歩せる理想を理解する力を全く有つて居らないことにして、二は如何なる進歩が實現されるにせよ、夫れは非利己的なる批判的知力階級の創始と努力とによらねばならぬことである。而して此等の事實の與へたる教訓によりて、茲に主觀主義派と稱せらるゝ新しき一派の思想家が現はれて來たのである。其の創說者と見做されて居るのは、さきにも述べし如くラレロヴである。併し此の主觀主義社會學的及び實證主義的世界觀の科學的建設及び精練に於て尤とも重大なる意義を有するものはミカイロヴスキであるのである。彼は當代の思想家及び社會運動家

中の最大思想家であつた。西歐思想と露國特有の實生活との衝突を現實に經驗することによりて露國の思想家の心の奥に於て無意識的に發生しつゝありし露國特有の社會的思想人生觀を明らかに觀破して、之を意識的に精練し、明快に表現したるは即ちミカイロヴスキイであつた。彼は深奥なる哲學的精神を具へ、豊富なる人生の智識と自然科學及び社會科學の根本的理解を有つて居つた。而して此等の勝れたる資格の力によりて、彼は所謂主觀主義的社會學を大成したのである。

四　ミカイロヴスキイの哲學的立場並に認識論的態度

ミカイロヴスキイは上に述べし如く本來深奥なる哲學的精神を具へたる人であつた。併し彼は彼の社會學說全體を組織的に論述して居らないよりも以上に彼の哲學的思想を組織的に論述して居らない。更に彼の哲學思想は夫れ自身に於て論述されずして社會學的論文や批評の中に含まれて論述されて居る。殊に彼の哲學思想は社會學的思想と一所に論述されて居つて、多くの場合に於て兩者は區別されないのである。此の點に於て彼はタールドと類似して居る。而してタールドの哲學は本來社會學的であつて、又彼の社會學は本來哲學的であると云ひ得らるるなら

ば、ミカイロヴスキの哲學及び社會學に就ても吾人は同じ評を下すことが出来る。後に述ぶる如く社會心理學の領分に於て兩者の類似は今日社會學者の間に一般に認められて居るので、模倣の法則や群集の心理に就てミカイロヴスキはタールドよりも先きに彼と同様な思想を述べて居つたと云はれて居るが、單に夫等の箇々の方面に於てのみならず、其の思想の全體に於て余は兩者の間に著しく類似せる傾向の存在するを感ずるのである。又人格及び文章に於ても兩者は相類似する處少なくないと思ふ。併しタールドは官吏として、又大學教授として平和な安穩な學者的生活を送つた人であるが、之れに反してミカイロヴスキは露國の歴史上比類なきスツルム、ウント、ツラングの時代に生れ、其の猛烈なる社會的運動の中心的精神として活動し、且つ忙しき雜誌記者の生活を送つた人である。而して此の如き生活境遇の差異からして兩者の思想や性格の上に種々なる差異を生じて居る。今此等の點によく注意して兩者を比較研究することは、現代社會學の研究上甚だ有益な又興味多き問題であると思ふが、茲に之を試みる暇はないで他日に譲る。要するにミカイロヴスキの哲學思想は夫れ自身單獨に論述されて居らないから、之を彼の社會學的思想や倫理學的思想等より區別して組織的に理解せんとするは甚だ困難である。

之れが爲めには詳しき研究を要する。併しまだ何人も之を試みて居らない、又余自身で之を試みる暇はない。殊に今日余の有する露西亞語の智識はまだ此の如き問題を自由に研究する餘裕を與へないのである。それで茲に彼の哲學思想として、余は只彼の一般的哲學的立場殊に認識論的態度の一般を述ぶるに止めて置く。蓋し先づ彼の一般的哲學的立場殊に認識論的態度の一般を理解して置くことは、彼の社會學說を深く理解する爲めに便宜であり、又必要であると考へるからである。而して彼の世界觀に就ては、實際彼れ自身の爲して居る處に従ひ後に彼の社會學說を論究する場合に、其の中に含めて論述することとする。

今近世露國思想史上に於て、獨逸浪漫主義哲學殊にシェリング及びヘーゲルの哲學が重大なる影響を及ぼせる第十九世紀前半紀は、同國民の哲學的思想が大なる發達を示せる最初の時代である。然るに獨逸夫れ自身に於て浪漫主義哲學が衰へ、ヘーゲル左派が勢力を振ふに至つて、其の影響が又露國の思想界に及び、茲に新しき時代が生れて來た。而して此の時代の代表的思想家の進める方針は大體上三種に大別して考へることが出來ると思ふ。一は主としてヘーゲル左派の影響によりて獨逸浪漫主義理想主義の方針を去り、唯物主義の方針に進めるものにして、二は主として

佛英の實證主義の影響を受けて其の方針に進めるものである。而してミカイロヴスキーは此の第二の方針に於て進める最も代表的な思想家と見做されて居るので、要するに彼の一般的哲學的立場は實證主義であるのである。併し彼の實證主義は單に佛英の實證主義を其の儘に祖述せるものに過ぎないか、又は何かオリヂナルな或物を其の中に含蓄して居るか。特に此の問題を研究せし人々の説に就て調べて見るに全體に於てオリヂナルな何物をも含んで居らないと見る人々と、其の中にオリヂナルな或物を發見せんと試みて居る人々とがあることを覺知する。余は茲に前者の見解をとる人々の一例としてマーザリックの説を述べ、而して後者の見解よりして彼を研究して居る人々の一例として、フランギアンの説を造べ、次に兩者を比較して少しく愚見を述べて見たいと思ふ。

今マーザリックが其の好著作 *Zur russischen Geschichts- und Religionsphilosophie, Soziologische Skizzen*, 1913 第二卷に於て、ミカイロヴスキーの哲學的立場を論じて居る處を見るに左の如くに述べて居る。「ミカイロヴスキーは彼の上に及ぼせるヘーゲルの影響が、既に大に減少して居ると云ふとによりて前代の思想家より區別される。而して彼の思想に決定的な影響を及ぼしたのは寧ろコントであつた。余はミカイロヴ

スキーは意識せるコンタイストであると云ひたい。併し批判的なコンタイストであるとは云ふことが出来ない。と云ふのは彼はまだ十分獨立に又十分根本的に認識論的批判を行なふて居らないからである。彼若し之を行なふたのであらば恐くは實證主義の立場に止まつては居らなかつたであらう。併し彼は彼の時代の人々の多數よりもより好く實證主義を理解して居つた。ミカイロヴスキーは認識論的には實證主義的な極端經驗主義者である。彼はミルの如く、觀察は或る指導的な理論なくしては行はれないが、而も此理論は前以て觀察が行はるゝに非ずは不可能であると云ふコントの見解を承認し、又ミルと共に、此見解は何等惡循環を含んで居らないと考へ、始めに無意識であつた觀察及び概括が後に明確に規定されたる一般的及び抽象的な命題となり、而して箇別的觀察を指導するものであると信じたのである。彼は又其等の命題は本來經驗より概括されたるものにして決して生得的なもの、先驗的なものでないと考へ、一切の生得的觀念を斷然排斥した。……形而上學に於ても亦ミカイロヴスキーはコントに従ひ、事物の本體は認識し得られないもの、捕捉し得られないものと考へた。併し此の命題をコント以上に究明して居らない。彼は時としては之をコント、ヒューム的に解し、又屢々カントに従ふて解

して居る。而も彼の保持せし見解は全體に於てはスペンサーの不可知主義である。要するに彼は知識相對性の概念を全くコントの意味にて解し、人間は五官以上に上ることは出来ない、而して絶對的眞理なるものは存在せず、只相對的眞理、人間の爲めの眞理のみが存在すると考へたのである。以上述べし處によりて見れば、ミカイロヴスキは認識論的には全然實證主義の立場に止まつたのである。されば彼の時代の思想家殊にラヴロヴの如く、彼も亦カントの觀念主義を其の批判主義の方面に於ては全く之を理解せずして不批判的に排斥し、先驗的を總て有機體の生理的差異に還元して居つたのである。併し夫れに係らず、ミカイロヴスキは極端なるレアリステンに於て見るが如き自然主義者でも唯物主義者でもない。彼は心理的現象は物質的現象と同等に實在的のものであると認めたのである。『SISO R. TSI.』

右に述べし處によりて見れば、マイザリクはミカイロヴスキの實證主義に何等オリヂナルな點を認めて居らないことは明らかである。彼の見る處では、ミカイロヴスキは批判的なコンタリストでさへない精々の處で意識せるコンタリストぐらいであつて、而して彼の實證主義の眞相は全體に於てはスペンサーの不可知主義と同様なるものである。ミカイロヴスキの實證主義の眞相は果して彼の見るが、

如くであるか。余は此の問題を考察するに先だち、ミカイロヴスキの實證主義にオリデナルなる或物を發見せんと努力せるフランギアンの研究を調らべて見やうと思ふ。

フランギアンは其の著 *N. K. Michailowsky als Soziogund Philosoph*, 1913 の第二章に於てミカイロヴスキの認識論を論究して居るが、其の大意を述べれば左の如くである。夫れミカイロヴスキは極端に形而上學を排斥した人で、此の事は彼の著作の各頁に於て認められる。而して彼の一般的哲學的立場は實證主義である。即ち彼は只經驗に於て與へられたるもののみを考究し、經驗以上に存在するもの、超越的のもの、は總て排斥すると云ふ意味に於て *Gegenheitsstandpunkt* の一代表者である。又彼の一般的方法論的立場は心理主義 *Psychologismus* である。即ち彼は與へられたるものを一の心理的事實として考へ、之を心理學的方法に従ふて研究した。而して認識論に於ては彼は現象主義者 *Phänomenalist* である。彼は此の與へられたるもの、此の心理的事實を單に現實として考へ、其の裏面に何が潜在するかと云ふ問題に就ては全く頓着しなかつた。是れ彼の見る處では人間の本性は現象以上の智識を求むることを許さないからである。此くて彼は只與へられたる自然現象及び社會現象のみ

を哲學的考究の對象としたので、彼の哲學的世界觀も亦社會學的世界觀も、總て全く生物的、心理的、倫理的及び社會的現象の上に立てられて居るのである。

今人間の智識の限界と自然(實際に有り得る經驗の範圍)の限界とは全然一致するものであると云ふは、ミカイロヴスキの認識論の一原則であるが、此原則は二重の意味にて重要である。即ち一は夫れ自身が重要な科學的意義を有すると云ふ意味に於て、二は批判哲學の多數の代表者が同じ思想を抱て居ると云ふ意味にて重要である。尙ほミカイロヴスキは其批判主義に於てカントよりも遙かに徹底して居る。と云ふのは先づカントは知識の限界と經驗の限界との一致を説くと、同時に經驗の限界の彼岸に存在する事物當體を考へるとが出来ると認めて居るが、ミカイロヴスキは吾人の思考もヤハリ經驗の限界以上に進むとは出来ない」と主張して居り、次にカントは悟性に於ても亦直感に於ても認識の先驗的因素を認めて居るが、ミカイロヴスキは此の如き先驗的因素を全然否定して居るからである。彼は「進歩とは何ぞや」の中に「吾人は現象と持續的關係とを知り得るのみにして、物當體は永久の暗黒である。絶對的眞理なる者は全く存在しない、只人間の爲の眞理があるのみである。而して人性の限界の彼岸には人間の爲めの眞理は存在しない」と斷言し

て居る。要するにミカイロヴスキは舊合理主義形而上學の反對者にして認識批判家であつた。此くて吾人は彼の思想に於て、批判主義及び經驗批判主義の大家の思想に合致する多くの點あるを發見することが出来る。而して吾人は此の方面より見て彼の認識論の價值を評しなければならぬ。

夫れよりフランギアンは先づアウエナリウスの經驗批判主義、純正經驗の根本思想がミカイロヴスキの說の中に發見されることを證明し、次にマッハの思想經濟の原理 *das Prinzip der Denkökonomie* も同じくミカイロヴスキの說の中に發見されること證明せんと企だて、而して終りに彼はアウエナリウスやマッハがまだ其等の根本思想や原理を説き始めない以前に於て既にミカイロヴスキが之を説いて居つたことを論述して居る。要するにフランギアンはミカイロヴスキを以て其等の哲學者の先覺者と見做して彼の認識論の眞價を示さんとするものと思はれる。

最後にフランギアンは實證主義一般、殊にコントの實證主義に對するミカイロヴスキの地位を論究して居るが、彼の見る處によればミカイロヴスキの實證主義はコントやミルの流を吸んで居るが、而も全く獨立なる性質を具へて居るものである。而して之を證明する爲めに彼は先づミカイロヴスキがコントに對して如何

なる批評を加へて居るかを示し、更にミカイロヴスキの實證主義の眞髓を闡明せんとして居る。今ミカイロヴスキはコントに對して如何なる批評を加へて居るかと云ふは、先づコントは尙ほ形而上學の立場に立つて居つて之を脱却して居らなことを非難し、更にコントの説は只其半分に於て正當であるだけで、他の半分に於ては實に正當でないのみならず、精密哲學の精神に背いて居ると非難した。而て此非難を加へると同時に彼自身の實證主義の眞義を發揮せんとて左の如く「進歩とは何ぞや」の中に述べて居る。「實證主義は今日迄只其仕事の半分を成就しただけである。即ち人間の立場を全體的統一的個人の立場として觀念せず、只認識する箇人の立場として觀念するに止まつた。されど正當なる人間の立場は認識し、感じ、又意欲する全體的個人の立場にして、此個人は人間の有機體に特有なる機官の總體并に方面の總體を包含するものである。而て此個人は一切の方面の統一的協働によりて吾人はブラヴダを獲得するのであるが、併し其ブラヴダは絶望的のものでなく人間に相應するものである。」(但しブラヴダと云ふは眞理と正義とを合せて意味する露西亞語特有の語である。)更に彼は他の場處に於て左の如く云ふて居る。「眞理は只人間の知識慾を充足するだけのものである。されば眞理は人間の一切の慾望を充足し

得るものと考ふるは大なる謬見である。尙ほミカイロヴスキは他の場處に於て認識の目的は智識慾を充足すると同時に實際的慾望をも充足するにあると説いて居る。要するにミカイロヴスキの實證主義の眞義は、人間を單に認識の方面のみから考察するのではなく、其の認識し感じ意欲する全體に於て統一的なる實在として之を考察するにあるのである。

却説以上述べしマーザリック及びフランギアの説を比較對照して考へると、前者はミカイロヴスキの實證主義を單にコントヤスペンサーの實證主義を祖述するだけの者で、何等オリヂナリテを含蓄しないものと見做すに對して、後者は之を其認識論の方面に於ても亦他の方面に於ても甚だオリヂナルなものと見做して居ることを覺知するのであるが、然らば何れの見解を以て正當とす可きが。余は明白に之を判定するだけ廣く又詳しくミカイロヴスキの著作全體を研究して居らないのであるから、茲に其の何れを以て正當と認む可きかを斷言するに躊躇するのである。併し余がミカイロヴスキの思想に就て今日有する智識の上から考へると、寧ろ其の認識論の方面に於てはフランギアの云ふほどオリヂナルのものでなく、寧ろマーザリックの説の方が穩當かと思はれる。フランギアのなすが如く、其處此

處にある斷片的なる言葉を集めて、アウエナリウスの經驗批判主義の根本思想や、マッハの思考經濟の原理の如きものが既に其の内に明らかに含蓄されて居るもののように解釋するは、穩健なる方法ではあるまいと信ずる。要するに余はミカイロヴスキの哲學的立場や認識論的態度其の物の内には別段オリヂナリチがあるとは考へないが併し之れによりて立てられたる彼の所謂主觀主義社會學にはオリヂナルな或物が含蓄されて居るかと思ふ。それで是れより先づ彼の社會學の根本思想并に其の一般を論究し、終りに其の中に含まるゝオリヂナリチの性質及び程度を評價して見やうと思ふ。とにかく以上述べし如くに彼の哲學的立場并に認識論的態度の一般を理解して置くことは、彼の社會學説を十分に理解する爲めに甚だ便宜である、否な必要であると思ふ。(未完)